プロティノスのエネアデス
「永遠と時間について」III-7-(45)

参考
アウグスティヌス「告白」

1
アイオーン(永遠)とクロノス(時間)はそれぞれ別のものである。そして一方は永久の本性のもとにあり、他方時間は生成しつつあるもの、つまりこの世界のもとにあるのだ、とわれわれは言っているが、

プロティノスのプトトンに対する尊敬

そこでわれわれは、これらについての古人の発言に――それもめいめいが異なる説を、そしておもちくはまた同一の説をもちがったふうに解釈しながら――

その際われわれは自分たちがいらぬ精神のから切断した態度によって、これらについてはっきりと、直接的にこれらについて明白なあるものを見る。

すがりつき、これらの説の上に安住し、もし質問されたばあいには、彼らの意見を引用することができればそれ十分だと信じて、そのうえになおこれらについて探求するという煩わしさを免れてご満悦である

そして、われわれはいつも語っているし、あらゆる機会にこれらの名称を用いている

けれども、われわれがこれらを注意深く検めようと努め、これらについわば近づこうと努力するならば、今度は反対に、われわれはどう考えてよいかさっぱり行き惑んでしまう

そこでわれわれは、これらについての古人の発言に――それもめいめいが異なる説を、そしておもちくはまた同一の説をもちがったふうに解釈しながら――

さて、無論古えの幸多き哲学者たちのうちのだれかが真実を発見したにちがいないと信じなければならない。しかしもっともよくそれに成功した人たちはそれぞれのかを、またどうすればわれわれ自身にもまた、これらについての理解が生じるかを考察するのが当然であろう

すがりつき、これらの説の上に安住し、もし質問されたばあいには、彼らの意見を引用することができればそれ十分だと信じて、そのうえになおこれらについて探求するという煩わしさを免れてご満悦である

なぜなら、原型の位置を占めるものが知られたならば、これの写し――時間がそれである彼らは言うのだが――の方の本質も、多分明らかとなることだろうから

そこでまず永遠について、これを時間とは別のものとしたのであるが、これをもう人たちが、これを何であるかと問べなければならない

なぜなら、原型の位置を占めるものが知られたならば、これの写し――時間がそれである彼らは言うのだが――の方の本質も、多分明らかとなることだろうから

2
では永遠とはいったい何であると言うべきか

それは、直知されるのーシア(実有)そのものであるのだろうか

ちょうどまた、時間とは天全体であり、この全宇宙である、どれかが言うかも知れないように

ただし、もしだれかが永遠を観照するよりも先に、時間をそれが何であるのかを表象したらば、そのように、時間がそれに似せて作られたものの表象を、多分明らかとなることだろうから

もし果してこれ(時間)があれ(永遠)に似通っているのであれば

というのは、永遠はもっとも巨離な何かであるとわれわれは表象していらし、そう理解しているのだが、他方また直知されるあなたの様子もものとも巨離であり、どちらかー方がより巨離であるとは言うことができないので

というのも、実際あるひとつの人たちは、時間についてまさにこの見方をもっていた、と言われているのだから

というのも、おまけにまた、直知される世界も永遠も再者とも包括的なものであり、しかも両者が同じものの(実に有るものの)を包括しているのであるから

また包括するということについては、一方のもの(直知界)に関しては、それは(全体が部分を包括するという意味でだろう)が、

――というのは、「霊(プラトン)の言うところでは、「原型の本性(永遠)であった」のだから――

また、両者どちらも巨離であることは同一性を示すものではない

なぜなら、それの巨離さは、あるいは両者の一方から他方へ伝えられたものならば

ちょうど、ここでも時間は運動に存する、とムドとが言うように

しかしそれでは、永遠はかの所の静止に存すと言うべきだろうか

しかし、だれかが正当にもこう尋ねるかも知れない

なぜなら、もし一方、永遠が静止と同じものだとすれば、第一に、静止が永遠的であることはわれわれは言わないだろう。ちょうど永遠は永遠的であるとわれわれは言わないだろう。なぜなら、永遠的なものとは、永遠にあずかっているものなのだから

次に動きがどうして永遠的であるのだろうか。なぜなら、そうだとすれば、動きが静止的でもあることになるだろうから

ただし、永遠はかの本性のもとにある、あるいはかの本性の内にある、あるいはかの本性に臨んでいる、とわれわれは主張するのだが

また、永遠はかの本性のもとにある、あるいはかの本性の内にある、あるいはかの本性に臨んでいる、とわれわれは主張するのだが

今度は逆に、永遠を(直知される本性とは)別のものとして、われわれは語っているわけである

しかし、一方は他方の内に――永遠の内に――存在するのだとわれわれが言い、そして前者に永遠性を述語するばあいには

というのは、永遠はもっとも巨離な何かであるとわれわれは表象していらし、そう理解しているのだが、他方また直知されるあなたの様子もものとも巨離であり、どちらかー方がより巨離であるとは言うことができないので

というのも、おまけにまた、直知される世界も永遠も再者とも包括的なものであり、しかも両者が同じものの(実に有るものの)を包括しているのであるから

また包括するということについては、一方のもの(直知界)に関しては、それは(全体が部分を包括するという意味でだろう)が、

――というのは、「霊(プラトン)の言うところでは、「原型の本性(永遠)であった」のだから――

また、両者どちらも巨離であることは同一性を示すものではない

なぜなら、それの巨離さは、あるいは両者の一方から他方へ伝えられたものならば

ちょうど、ここでも時間は運動に存する、とムドとが言うように

しかしそれでは、永遠はかの所の静止に存すと言うべきだろうか

しかし、だれかが正当にもこう尋ねるかも知れない

なぜなら、もし一方、永遠が静止と同じものだとすれば、第一に、静止が永遠的であることはわれわれは言わないだろう。ちょうど永遠は永遠的であるとわれわれは言わないだろう。なぜなら、永遠的なものとは、永遠にあずかっているものなのだから

次に動きがどうして永遠的であるのだろうか。なぜなら、そうだとすれば、動きが静止的でもあることになるだろうから

ただし、永遠はかの本性のもとにある、あるいはかの本性の内にある、あるいはかの本性に臨んでいる、とわれわれは主張するのだが

また、両者どちらも巨離であることは同一性を示すものではない

なぜなら、その巨離さは、あるいは両者の一方から他方へ伝えられたものならば

ちょうど、ここでも時間は運動に存する、とムドとが言うように

3
では、これは何なのか

――それによって、かの世界の全体がアイオーニオン(永遠的)であり、アイデイオン(永久)である、とわれわれが言う、このものは、またアイデイオテース(永久性)とは何であるのか――

これがアイオーニオン(永遠)と同一のものであるにせよ、永遠がこれによって存在するのであるにせよ

そもそもこれ(永遠)は、何か一つのものによって存在しているのだろうか、つまり、この世界は一つであるのだが、しかし数多くのことをなしし、多くのものでもあるわけだろうか

そしてこの本性は、それらのすべてであるのだろうか、つまり、この世界は生が同一であり、決して異なるものとならず、或るものから他のものへと変化せず、いつも同じで常に非延長的であるこ、以上のすべてを見たムは永遠(永生)を見たのである

そしてそのうえで、彼が今度は逆に一つに合成し、これらの内に一つの純然たる生命のみがあるように(ストーズが生命である)、これらの限の差異性を減却し、(生命)活動の不休であること、直知されるは生が同一であり、決して異なるものとならず、或るものから他のものへと変化せず、いつも同じで常に非延長的であること、以上のすべてを見たムは永遠(永生)を見たのである

さてそこで、多種なカを見てとったムは、(この本性をいわばその基体の面から実見と呼び、また彼がそこにおいて生命を見いだす面を動と呼び、さらに全く同一であるこの活動を静止、またこれら(有・動・止)が一緒に一つになっている状態で、かの本性を真におよび同と呼ぶのである

すなわち彼は、同じものの内に常にとどまっている。一切を現在のものとしてもっている生命を見たのである

――それは別のものであるにせよ、永遠がこれによって存在しているにせよ――

――なぜなら、それにおいて<あった>、そして過ぎ去ったものとは何であろうか――

――それは今もっていないものが、将来あろうとしているのでもあるし、必然的にかの基体は、それのもとに<あった>をもたらしたろうし

――というのは、このものは<あるだろう>へ変化しないし、またかつて変化しなかったこともないのであり――

――というのは、永遠はいつも同一であり、そしてこれ(永遠)は、彼のもとにあるものとして、常に現在のうちにある

――というのは、永遠は、それのいかなる部分もかつてもなかったし、また今後決してあることもないであろうし、また今後もないであろうし、また今後もないであろうし、また今後も